

# 「御田之歌」(伊勢神宮文庫蔵) 歌詞章注解(二)

「荒田におよゆる……」の歌詞章について(その一)

竹 本 宏 夫

先に標題を「御田之歌」(伊勢神宮文庫蔵) 歌詞章注解(一)「口

本文学の伝統と歴史」所収)としてこの「御田之歌」に所収されている四歌詞章、すなわち副題にかかげた「朔日よりも——黒鳥の——精の米の——京より来るや腹雀ハ——」を取り上げたが、ここではそれにひき続き「荒田におよゆる——」を取り上げる。

(原文・振り漢字)

あら田におよゆる(生)くとみくさの花をあら田におよゆとみくさはなをけにとりもちとのゑまいらふやそもよかなれやとみくさの花(生)をけにとりもちとのに参よ(生)

(寛文本伊勢大々御神楽の田歌及び内宮大御田祭歌へ本田安次氏「民俗芸能の諸問題・その二——田植と田楽——早稲田大学大学院文学研究科紀要十九輯」所収)との対比)

寛文本田歌にこの歌詞章は見られないが、内宮大御田祭歌では、「新田におよゆく——富草の花を 新田におよゆ 富草花を 筒びに取り持ち 殿へ参らふや そもよかなれや 富草の花を 筒びに取り持ち 殿へ参らふよ」である。細部の致箇所において他は一致している。

(校異)

当田歌では二箇所所に朱による異同の書入れがみられる。最初に出てくる「とのゑ」が「とのへ」、また嘸し詞の「そもよかなれや」が「そもよかなれや」である。一方、内宮大御田祭歌ではこの朱による書入れの方であり、いま二箇所「とのに参よ」が「とのへ参らふよ」である。細部において致箇所の相違が見られる。

当田歌は、嘸し詞や繰返し部分を除くと、中心は大体「荒田に生よゆる富草の花を筒に取り持ち殿を参らふや」となる。

この歌詞章は、古くは「風俗歌」として、

阿良太アラタニオフル 止見久左乃者奈 天余川見礼天也 見也部末以良无也 々々々々々風俗(承德三年書写古謡集・日本古典全集刊行会歌謡集上古篇)

荒田に生ふる、富草の花、手に挿入つれてや、宮へ参らむや、参らむや(承德本古謡集・純日本歌謡集成巻二)

荒 田

アラタニオフル トミクサノハナ テニツミレテミヤヘマイラム ヤ カツタエ(風俗譜・日本歌謡集成巻二中古編)

このように出てくる。前者が「承徳三年三月五日」、後者が「文治二年二月五日」の奥書を持つものにおいてである。後者の流れには、また、

安良太仁於不留 止見久佐乃波奈 天仁川見礼天 見也戸末井良  
牟 奈加川太衣

（荒田に生ふる 富草の花 手に挿入て 宮へ参らむ なか  
つたえ）（風俗歌・岩波日本古典文学大系古代歌謡集

このように一部に異同のみられるものもある。また、歌詞章そのものではないが、「応永卅二年閏六月九日衆人従三位源朝臣信俊」の奥書を持つ「風俗目録」（梁塵曲惣目録・上代歌謡集・日本古典全集）の中に、この歌詞章の題名である「荒田」がみられる。

この歌詞章はまた、平安朝から鎌倉にかけての随筆、歴史物語、日記などの中にも出てくる。「枕草子」では次のようである。

まして、臨時の祭の調楽などは、いみじうをかし。主殿寮の官人などの、長松を高くともして、頸は引き入れて、先はさしつけつばかりなるに、をかしう遊び、笛吹き出でて、心ことに思ひたる君達の昼の装束して立ちとまり物言ひなどするに、殿上人の隨身どもの、先のびやかに短く、おのが君どもの料に追ひたるを、遊びにまじりて、常に似ずをかしう聞ゆ。なほあげて帰るを待つに、君達の声にて、「荒田に生ふる富草の花」うたひたる、このたびは、いますこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ、すくすくとさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「しはし。」「なとさ夜を捨ててはいそぎ行く」とあソめる」など言へど、心ちなどやあしからむ、倒れぬばかり、もし人や追ひてとらふると見ゆ

るまでまどひ出づるもあソめり。（枕草子・小学館日本古典文学全集）

賀茂の臨時の祭の調楽時、その帰りに、君達によってこの歌が歌われている。小学館本の頭注には「荒田」を調楽の退出の時にうたうのは故実であるらしい。」という御考察がある。

同じく平安朝の「大鏡」では、次のようである。

この殿こそ、「荒田に生ふる」をば、なべてのやうには謡ひ交へさせたまひけれ。一条院の御時、臨時の祭の御前のこと果てて、上達部たちの物見に出でたまひしに、外記の隅のほど過ぎさせたまふとて、わざとはなく、口ずさみのやうに謡はせたまひしが、なかなか優におぼえはべりし。「富草の花、手に摘みいれて、宮へまゐらむ」のほどを、例には変りたるやうにうけたまはりしかば、遠きほどに、老の僻耳にこそはと思ひたまへしを、この按察大納言殿もしかのたまはせける。「殿上人にてありしかば、遠くて、よくも聞かざりき。変りたりしやうの、めづらしう、さまかはりておぼえしは、あの殿の御ことなりしかばにや。またも聞かまほしかりしかども、さもなくてやみにしこそ、今に口惜しくおぼゆれ」とこそたまふなれ。（大鏡・小学館日本古典文学全集）

やはり賀茂の臨時の祭時においてである。清涼殿の東庭の儀がすんで、上達部達が物見に出かける時、その中にいた一条殿雅信公によって、例には変りたるやうに「わざとはなく、口ずさみのやうに」この歌が歌われている。この点に関して、「なべてのやうにはうたひかへ」というのは、普通のうたいざまとは歌い変えたの意であるが、都ふうに変更しようとしたのであろう。」（大鏡補注・岩波日本古

典文学大系」とか、また『大鏡』に、源雅信が「荒田」を改訂したとあるのは、かならずしも歌詞の形式に關したことではないけれど、貴族たちの側から風俗歌を都ふうにあらためようとする動きのあったことは否定できない。(古代歌謡集・風俗歌解説・岩波日本古典文学大系)とかいった御考察がみられる。

時代は鎌倉に入つて、「辨内侍日記」の「建長二年十月十九日」の条では次のようである。

十九日。節会。露台の乱舞などはてゝ、御前のめしつねよりもいとおもしろく、ものいひてのよまひには、左頭中将。為氏。六位や候。さしあふらせよ。右頭中将。さねひさ。うちなかめて。かほつえつきて。とよのあかりはくらさりけりと、為氏か方みやりく／＼なかめたりし。おかし。経忠はきぬかつきならひみたるをみて。このほとはしろう／＼。又そくたいの人々みやりて。あしこのほとはくろ／＼とはいひし。これもとはていつていはたかなそ刑部卿ときこゆるる。てんたつしやはこ正くはんより次第いひつ／＼けて十月は十せれうたにまひ給。ましてむねのりかまはさらめやは／＼とてをれこれれ。身をなきになしてまひたりし。ふしきにおかしく興あり。つねさたむはらこきのしたにいたち。ふえふく。さるかなつ。ことにおもしろくきこえき。ものさねに為氏。実久。経定。伊長。為教。経忠。伊基。みなむれたちて。あらたにおふるとみくさの花。おもしろくうたひて。たうへまねしたりし。なに／＼もすくれて。ことにおもしろく見え侍しかは。辨内侍。

君が代に靡かぬ人はあらしかし風になみよるをたの早苗は

豊明節会時に、同じく風俗歌とみられている「次小木の下には 麴鼠笛吹く 猿奏づ 稻子丸は拍打つ 蟋蟀は鉦鼓打つ」(古代歌謡集・風俗歌「体源抄」・岩波日本古典文学大系)とともにこの「荒田」の歌が出てくる。ここでは、その場の大勢の者が群れ立つて、この「荒田」を唱和し、唱和しながら田植の真似事をし、作者をして「何にも優れて殊に面白く見え侍りし」と感せしめてゐる。はなやかな田園の反映の様子や、この歌詞章が古くからの田植歌であつたことをみてとることができる。

この歌詞章において、注釈上問題でもあり、また多く論じられてきているのが「富草」である。まず、この語の使用例をあげると次のようである。

末

アマナルヒバリヨリコヤ<sup>一</sup>作<sup>オ</sup>於<sup>ヒ</sup>バトリミクサトミクサモチチ  
安女奈留比波利與利己夜<sup>一</sup>作<sup>オ</sup>於<sup>ヒ</sup>バトリミクサトミクサモチチ  
利己夜<sup>一</sup>

一作<sup>ト</sup>止<sup>ミ</sup>美<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>佐<sup>ク</sup>止<sup>ク</sup>美<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>左<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>比<sup>ク</sup>天<sup>ク</sup>、或  
作<sup>ニ</sup>久<sup>ク</sup>比<sup>ク</sup>止<sup>ク</sup>美<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>左<sup>ク</sup>止<sup>ク</sup>三<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>左<sup>ク</sup>毛<sup>ク</sup>千<sup>ク</sup>天<sup>ク</sup>、

又末返

アマナルヒバリヨリコヤ<sup>ヒ</sup>バトリミクサトミクサモチチ  
安女奈留比波利與利己與也<sup>ヒ</sup>比波利止<sup>ク</sup>美<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>佐<sup>ク</sup>止<sup>ク</sup>美<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>左<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>比<sup>ク</sup>天<sup>ク</sup>  
歌・志都夜乃小菅・楽章類語鈔・日本歌謡集成卷二(中古編)

天なる雲雀 寄り来や雲雀 富草 富草持ちて

天なる雲雀 寄り来や雲雀 富草 富草くひて(神楽歌・

小学館日本古典文学全集)

はなやさきたる 竹原 やすらいハナヤ

はなやさきたるや 同 やすらいハナヤ

はなやさきたるや 同 やすらひハナヤ

帖音に唱て急に 同 乱拍子になりぬ

やとみくさのはなや 同 やすらひ花や

やとみをせはなまへ 同 やすらひ花や

やとみをせはみくらの山に 同 やすらひ花や

やアまるまでいなまへ 同

やアまるまでいのちをば 同

やちよのちよそへや 同

やこのとめをなまへ 同

やこのとそをやねのせき 同

や。はしめてなまへ 同

やはしめてちよふる神の 同

やミまやとのミせむや 同

やさりなへこなへ 同 やとるまろもやすら

やさけなへとなへ 同 やひたまろもやすら

返唱

やさかこほたひに 同 とりたふなり

やたどりたつなり 同 やよよひにきて

よひにきて ねなまししかわ

やとりたゝまし 同 やとりたゝまし

やいまあらそはで 同 ねなましものを

いまほもひでゝ 同 あなにしたらこひむ (梁塵秘抄口伝集卷十四)

日本古典全集刊行会歌謡集上古篇

此殿は宜も富けり富草の 一段

八握穂実熟秋津洲の 二段

國も治朝日山光和ぐ天地の 三段

神の恵の御田屋守 四段

時五月の從今日や早苗取ちふ郷を榮る 五段

千歳楽や万歳楽万歳云々。「文学」講座附録第七号所載「兎道旧記浜千鳥抄」御田種・日本歌謡圈史

若苗植ようよ。若種植ようよ。女の手に手を取りて。拾ひ取るとよ。ヤレ〜。

御席も敷けや。若苗取る手やは。白玉取る手こそ。白玉ナユラヤ。富草の花ヤレ〜。

福萬石に。本國へ植ちらして。手に手を取りて。拾ひ取るとよヤレ〜。

千早振。神の社しなかりせば。春日の原に。粟時かましを。(春日神社の田歌・日本歌謡史)

あすよりは外面の小田に袖ぬれの富草の早苗植つ覽鴨(蔵玉和詩同作抄にあり)

集草木異名・群書類従十六輯

并月之名

さいはひ

み山なる富草の花つみにとてゆるきの底をふり出てそこし(相模)

集・群書類従十五輯)

後冷泉院の御時、大嘗会の主基方の御屏風に、備中国たかくら山に、あまたの人花摘みたるかた書きたる所によめる、打ちむれて高倉山につむ物はあらたなき世のとみ草の花(詞花和歌集十雜下・国歌大観)

俊成卿九十賀に

権中納言隆房

このそちよはひを君にゆつりおきてなほ春秋のとみ草のはな

(動植名彙卷二・伴信友全集卷五)

今よりの秋を懸つゝ民の戸もとみ草の早苗露ぞ涼しき(後柏原帝御製・米と日本民族)

我くに長田の早苗うつさすはいかせん世のとみ草の花(神祇

百首・大日本地名辞書)

萬代の、恵みも久しとみ草の、恵みも久しとみ草の、種も栄

行く秋の空、露も時雨も時めきて、四方に色添ふ初もみぢ。

(花筐・岩波日本古典文学大系謡曲集上)

類出する語とは察しられないが、しかしこのように歌謡、和歌、謡曲の各分野にわたって、その用例をみてとることができるといえる。

これら「富草」が何であるか、その語意については古くから考察の対象とされてきている。(1)辞書類にみえる語意、(2)神楽歌及び風俗歌の考察にみえる語意、に分類してかかけると次のようである。

(1) 辞書類にみえる語意

異名

堀川院異名  
吉野草樓

同

草梅

風待草同

河そひ草柳

草松

龍田草紅葉

常盤草

富草松

幸草同

曙草櫻

かさし草同

文見草荻

風聞草同

玉見草萩

日暮草撫子

富草

同

あすよりは外面の小田に袖ぬれて富草の早苗植つ覽鴨

神代の稻の名。天神の御田。あまの里なる田には。そさのぞの尊。あまのおちごまをはなち。其時の稻の名。あまのをし草。

かくしまはせともいふなり。是は稻にて飯になす物をいふ也。

(蔵玉和詞集・群書類延十六輯)

田秋。さか。山。かり。ほ(穂)。あら(あれとも)。しのび

(忍てかる也) 広田、桜田等(寄)名所也。し(鹿猪)。

神。を。わざ。はつ。野。み山(を山とも)。さは(初字)。み

なと。沼。野。みそ。門。いほしる小田(五百代)。あしはら。

おそ。ひつち(又生也)。浮。うへ。夜。水。そか。にひばり

とはあをき田也。ゆだねまくとは、たね蒔也。万に、秋の田の

ほだのかりばと云、かる心也。いねのたね(を)ばいなくばと云

(古語拾遺)。(田のも(田而也)。(そほつ(おどろかし也)。(みとし

ろ(社田也)。(おしね(おそきいね也)。(わさ田(はやき田也)。

わけ(はやき也)。(田にはそしる、はしると云物なり。田うゑ

はてたるをば、さのぼりと云。田植はみたやもりと云(其中の

主人也)。(たご(うづる女也)。(あまのくひだ(そさのをの御田

也)。(つくばねのすそわの田井とは、山のすその田なり。さな

へとるとは、うゑんとするをり也。うづるをばるとはいへど

も、五月雨になへひきううるたごよりもなど云へり。其外うるといふ多し。ほむけはほの間也。苗代は春たねまく。さなへは夏ううる也。いなば。にひはり(青時也)。おちぼ。はつほ。

民の草。むらなへ。はやわせ。門田わせ。とみくさ(田ばな也)。ゆきあひのわせ(をとめぐに行あひのわせと云へり)。むろのはやわせ。ながひこのいね。にはなみ(ことしあたらしきいね也。神にたてまつる也。わがせこがわざとつくれる秋の田の

わさばのほぐみといへり。やつかほのいねと云は、大なるいねのやは有也。(日本紀云、いねの始也。)(八雲御抄卷第三地儀部・日本歌学大系別卷三)

稲とみ草 民の草原(言塵集五・古事類苑植物部十二) 富草 あすよりはそものをだに袖ぬれてと草のさなへうへつらんかも、とみとはよまず、これ稲の異名也、(藻塩草三地儀・古事類苑植物部十二)

うちむれてたかくら山につむ物はあらたなきよのとみくさのはなうちむれてたかくら山―うちむれては打群りて也。あらたなき世は新なる世と同じ。とみ草は稲の事也。御代の始なれば新なる代と也。(八代集抄)

とみくさ 富草と書り梁塵抄に稲をいふと見えたりされハ相模家集にみ山なるとみくさの花といひ詞花集に 打むれて高倉山につむものハあしたなる世のとみくさのはなとよめるハ山に意あるにあらす高倉山ハ伊勢外宮の山也○近江多賀社にてかつらをとみの木といへり○蔵玉集にと見草ハ檢也ともいへり (増補語林倭調)

とみくさ (古本神楽) (古本風俗) 荒 田安良太仁、於不留守見久佐乃波奈、天仁川見禮天、見也戸末井良牟云々、(相模集) 箱根権現に奉れる百首の中題さいはひ一深山なるとみくさのはなつみにとてゆるきの袖をふりて、そこし(詞花) 雑家経朝臣「うちむれて高倉山につむものはあらたなる世のとみくさの花 俊成卿九十賀に権中納言隆房「このそちよはひを君にゆつりおきてなほ春秋のとみ草のはな 信友按に家経朝臣の歌によれば風俗歌は新生ふるの意にて荒田と題せるは借字なり(動植名彙卷二草類・伴信友全集卷五)

(2) 神楽歌及び風俗歌の考察にみえる語意 あめなるひばりよりこやひばりとみ草もちて 愚案ひばりはあがりて空に轉る鳥なれば天なるとはいへりより こやは寄来と云也富草は稲は云なり(梁塵愚案抄・日本歌謡集成卷二)

あらたにおふるう、とみくさあ、、、のはあ、な、あ、、、 てえ、にい、つう、、、みれ、、、て、、、みやへえ、引まゐらあ引む、なかつう、たえ、引

荒田は、初て田にひらくを云、又耕さざる以前をいふ歟、とみ草は、神楽歌にもみゆ、山にある一種の草なるべし、稲のこととするは一わたりのことなり、てにつみれてみやへまらんは、其花を手に摘入て宮中へ参らんとなり、なかつたえのえの字心えがたし(風俗歌考・賀茂真淵全集第二)

安女奈留比波利、與利己夜、(興を一本於と有はよく聞えたり) 比波利、止見久佐、止見久左久天、(万葉に鳥の枝くひ持てとよ

とみくさ (古本神楽) (古本風俗) 荒 田安良太仁、於不留守見久佐乃波奈、天仁川見禮天、見也戸末井良牟云々、(相模集) 箱根権現に奉れる百首の中題さいはひ一深山なるとみくさのはなつみにとてゆるきの袖をふりて、そこし(詞花) 雑家経朝臣「うちむれて高倉山につむものはあらたなる世のとみくさの花 俊成卿九十賀に権中納言隆房「このそちよはひを君にゆつりおきてなほ春秋のとみ草のはな 信友按に家経朝臣の歌によれば風俗歌は新生ふるの意にて荒田と題せるは借字なり(動植名彙卷二草類・伴信友全集卷五)

み後の物語ふみに花の枝くひてとのみも書たれば今をよしとす一本に毛知天と有は中々たらず止見久佐は稻の名の如くとりなして詞花集又俊成九十賀にもよみたれど例の推はかりと聞ゆ今考るに古本の風俗歌の荒田ぶりに安良太仁於不留守止見久佐乃波奈天仁門見禮天見也戸末井良牟と有ぞ是には侍るさて荒田に生ると云は春田に生る小草の事なり手に摘といへるも志かなりひばり乃天にのぼるも春なり稻は秋の物なればいとよしなし風俗歌は古きものなるに志かあれば外は云にたらず」〔相模家集に「み山なるとみ草の花つみにとてゆるきの袖をふりてぞこしと山にいへるはいかゝなれど是もつみにとてと有は右に似たり」〕（神遊考・賀茂真淵全集第二）

あめなるひばり、よりこやひばり、とみくさ、とみくさもちて。

○あめなるひばり」抄曰「雲雀はあがりて空に轉る鳥なれば、天なるといへり」○よりこやひばり」一本におりこやとあれば、よは誤りにやとおもふに、文治節付本、又一本の古本にも與とありて、嘉禎本細書に「以於唱與依音振也。於不可唱」とあり○とみくさもちて」抄云「富草は稻を云也」今按に、とみ草の事いろく云て随かならぬことなれど、此歌にては御説も似つかはし。もちては抄又一本等に、くひとありて、万葉にも「ほこくひもちて、枝くひもちて」などあれば、其かた正しきやうなれど、節付の古本どもに皆かくあれば、漫に改むべからず。さてこの本末の歌の上も、何かそへたる意ありつらん。

（神樂歌入文卷下・橘守部全集卷七）

安女奈留比波利與利古夜比波利止見久佐止見久佐毛知天

あめなるひばりよりこや雲雀とみくさもちて

天なるひばり本抄に云る如く空に高く轉る鳥なれば天なるといふへしおりこやは下り也與利こ也と有も歌ふに任てうつれる音にて同意也富草くひてと有もよく比持て也本抄富草を稻の事と有しかるへからす花をいひ山なともよめる歌有風俗歌に安良太仁於不留守止見久佐乃波奈天仁門見禮天見也戸末井良牟といへるはげんげばなるべし此花荒田に満々てさけは富草といふか又農家の人のいふをきけは此草を田の土の下にかり入れ苗代草と云ものにすれば稻よく登るといひて生ぬ所には求めて種を蒔くとそ此はな咲満る田をはさなからかへしなとする田の為にいと宜とそさらば稻を富す草の心にていふや迂説に似たれと捨かたし今トビ色といふ色あり即トミ草ノ花色なるへしげんげの咲満たるはいかにも今いふトビ色なりさなくてはトビ色といふ語の出所なしさて此富草其名は聞えなから実物ははやくうしなはれしにや六七百年はかり昔の人のよめるもおしあてにやとおもはるゝか多し此神樂にいへる歌の意必げんげを雲雀の喰ものにもあらねと轉る時にうちあひて田や野や咲みちたれはいへるなり 入綾にも富草の事は本抄にゆつりて何ともいはず○ちなみに云師説に古へ重とよみ来れるはげんげ花なる事既に明けし是をもときてさにあらずやはりスモトリ草なりと云人も聞ゆれと古歌皆重はげんげならてはけしきかなはずよく吟し見るへしさてスミレはツミレにや此花必手に多く摘ためらるゝ物なればツミイレ花と云がツミレといひなされ又スミレともうつれるなるへきか上に云風俗歌にも手につみれてみやへまゐらんと

へるにあらすやツボ草は摘ためたるかたちによ(梁塵後抄二・訂正再版国文注釈全書・皇学書院)

鎌倉期から室町期にかけての考察では、「一條禪閑兼良の著、神楽歌催馬楽歌の註釈書としては最も古いもの」(日本歌謡集成第二解説)である「梁塵愚案抄」の一本を除き、他はすべて歌学の面からのものであるが、問題の「富草」は、ここでは対象外と察しられる。いま一つの富草である「富草松」(蔵玉和詞集を除いて、「稻」・「田ばな」(「田の花」・「稻」・「稻」・「稻」である。「稻」と「田花」の二種類がみられ、概して「稻」の異名ということであるが、「田花」は必ずしも「稻」のこととはならず、「田に咲く花」ともとはしれないかと察しられる。江戸期に入っては国学者などによる研究が盛んになり、賀茂真淵は、前期から続く「稻」の異名説を「稻のこととするは一わたりのことなり」(風俗歌考)・「稻の名の如くとりなして……例の推はかりと聞ゆ」(神遊考)と否定して、「山にある一種の草なるべし」(風俗歌考)・「春田に生る小草の事なり」(神遊考)としている。橘守部は、「此歌(神楽歌)にては」と限定した上で、「抄」がいう「富草は稻を云也」とする説を「似つかはし」とし、従来から一般化している「稻」の異名説に従っている。熊谷直好はまた、この通説化している「稻」の異名説を「本抄富草を稻の事と有しかるへからす花をいひ山などにもよめる歌有」と否定し、種々理由づけた上で「げんけはなるべし此花荒田に満々てさけは富草といふか」と、「げんけ花」説をうち出している。これは、「八雲御抄」の流れに立つとも考えられる真淵の「春田に生る小草の事」に、「げんけ花」という個有の名称を与え

たものとなっている。江戸期に、他に「富草」に触れた説もあるうかと察しられるが、概してこの期の「富草」の語意を、(1)鎌倉・室町から既に一般化してきている「稻」の異名説 (2)「山にある一種の草」説 (3)「田花」から流れるやにも察しられる「春田に生る小草」説 (4)「げんけ花」説 の四種類に整理をすることができるかと思う。

この「富草」の語意は、定着することなく、神楽歌及び風俗歌の「富草」、それに新しく「夜須礼歌」(日本歌謡史) または「美濃田歌」(同上) のそれが加わって、それらを中心に以降も考察の対象とされ続けている。(1)辞書にみえる語意 (2)風俗歌の「富草」を中心とする語意 (3)神楽歌の「富草」を中心とする語意 (4)夜須礼歌の「富草」を中心とする語意 に分類して、それら各々の御考察をかがげると次のようである。

(1) 辞書にみえる語意

いね(稻)ノ異名。用例(神楽歌・風俗歌・枕草子・相模集・詞花集)(大言海)

いね(稻)の異名。用例(神楽歌・枕草子・夫木和歌集)(大日本国語辞典)

稻の異名。用例(枕草子)(大漢和辞典)

「稻」の異名。用例(風俗歌)(旺文社古語辞典)

《幸福をもたらす力のある草の意》稻の異称という。用例(風俗歌)(岩波古語辞典)

(2) 風俗歌の「富草」を中心とする語意



「梁塵愚案抄」には「富草は稻を云なり。」とまでいってあるが、……「梁塵後抄」にある如く「げんげ花（蓮華草）」とする解釈が当たつてゐると思はれ、「げんげ」も豊饒の田を祝ふ意味に用ゐられたことは明らかである。（日本歌謡圖史）

稻または稻の異名。（岩波日本古典文学大系古代歌謡集・枕草子・小学館日本古典文学全集大鏡）

(3) 神楽歌の「富草」を中心とする語意

幸福をもたらす力のある草。風俗歌（一六）にも「歌詞略」とあり、一般には稻と解釈される。しかし、花を手に摘み入れるとは、どうも稻の感じでないし、神楽歌の方も、雲雀に配された季節感はどうも春めいた趣になる。後抄は、蓮花草のことだとし、荒田にこの草をかり入れて苗代草にすればよく稔るので、稻を富ます草の意で富草と称したものと説く。風俗歌については、後抄の説がよくあたる。神楽歌の方も、蓮花草で通るけれど、この場合は、單なる植物ではなく、それによって何かの幸福がもたらされる葉の感じである。後抄は、さらに富草が何であるかは、平安時代から明確でなかったらしいと説くが、これも同感。（岩波日本古典文学大系古代歌謡集）

一般には稻の異称とするが、「梁塵後抄」は風俗歌「荒田<sup>あつた</sup>」の「歌詞略」を引き、蓮華草であろうとする。田に刈り入れて稻を富ます草とみたのである。要するに、「富草」とは生活の幸福をもたらすと信じられる草のことで、生活圏によって異なってくる。（小学館日本古典文学全集神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集）

気分的にはわかるが、はっきりとは解釈できない。米のなる木だともいうが、それは合理的すぎる。天上にあると思つてゐるところの、幸福を招来する植物としておく。（鑑賞日本古典文学歌謡

I）

(4) 夜須礼歌の「富草」を中心とする語意

富草は一般に稻の異名。一説に稻を富ます草の意で蓮花草のこととする（梁塵後抄）。ひろく幸福をもたらす力のある草の意か。

用例（風俗歌・神楽歌）（日本古典全書新訂中世歌謡集）

農民がひたすらに頼る稻をば富草と呼んで言祝ぐのであつた。

（角川書店日本の歌謡）

殆どものが「稻」の異名説または慣習的にその「稻」の異名を掲げており、また、江戸期の「梁塵後抄」の「げんげ花」説またはこの「後抄」の説を掲げたものもあるが、この期に至って新しく「幸福をもたらす力のある草」・「生活の幸福をもたらすと信じられる草、生活圏によって異なってくる」・「天上にあると思つてゐるところの、幸福を招来する植物」・「ひろく幸福をもたらす力のある草」など、「幸福をもたらす力のある草」を幹とし、またそれから枝葉を出したと察しられる説が登場して、一般にこうした説によらうとする傾向がうかがわれる。概してこの期の語意を、(1)従来からの「稻」の異名説 (2)江戸期からの「げんげ花」説 (3)新しく「幸福をもたらす力のある草」説、それに風俗歌、神楽歌で語意の異なる(4)風俗歌は(2)とし神楽歌は(3)とする説の四種類に整理できるかと思う。

この「富草」の語意考察史は概略ながら以上のものであり、種々

なる説が呈示されてきている。この「富草」の語意の考察は、まずこのような語意考察史の上に立ち、更に次のような諸点の考慮が必要と考へる。

(4) 先に掲げた一連の用例を「富草」部分に視点を置いて整理すると、「富草の花」・「富草」・「富草の花」・「富草の八握穂」・「富草の花」・「富草の早苗」・「富草の花」・「富草の花」・「富草の花」・「富草の早苗」・「富草の花」・「富草の種」となる。「富草の花」が七例、「富草」が一例、「富草の八握穂」が一例、「富草の早苗」が二例、「富草の種」が一例である。この用例の概観から次のような事項を引き出すことができるように思う。

「富草」が孤立した語として出てくるのは十二例中神楽歌の一例のみであり、他はすべて「の」をとまなう修飾句の形である。「富草の」に修飾される被修飾語は「花」・「八握穂」・「早苗」・「種」などであるが、これらは自然が生起をはじめ花々で大地をいろどる春を出発点とする農耕、なかならず稲作関係のものである。

孤立の「富草」と修飾句の「富草」との因係は、孤立のそれが修飾句化したものと考へられる。

「富草の花」・「富草の早苗」などという表現は、「富草」という名称の花」・「富草」という名称の早苗」という意味ではないと判断される。

(4) 神楽歌における鳥は、古事記にも「雲雀は天に翔る高行くや速総別鷓鴣取らさね」(岩波文庫本古事記)と登場する「雲雀」であり、その雲雀が「富草」をくったり又は持ったりして来ると

いうものである。鳥やくわえるものは異なるが、「倭姫命世記」(岩波日本思想大系・中世神道論)には同類の次のような記述がみられる。

二十七年戊午秋九月、鳥ノ鳴ク声高ク聞えて、昼モ夜モ止まずシテ鷓鴣シ。「此レ異シ」ト宣タマヒテ、大幡主命と舎人紀麻呂良トを使ニ差シ遣ハシテ、彼ノ鳥ノ鳴ク処ヲ見シム。罷リ行きテ見レバ、嶋国伊雜ノ方上ノ葦原ノ中ニ、稲一基在リ。生ヒタル本は一基に爲テ、末ハ千穂ニ茂レリ。彼ノ稻ヲ白キ真名鷓鴣カケヘ持ち廻リ乍鳴キキ。此レヲ見頭ハスに、其ノ鳥ノ鳴ク声止ミキと返事申しき。尔の時倭姫命宜たまはく、「恐シ。事問ハヌ鳥スラ、田ヲ作りテ皇太神ニ奉ル物を」と詔ひて、物忌始め給ひて、彼の稻を伊佐波登美神を爲て拔穂に抜かしめて、皇太神ノ御前ニ懸久真カケに懸ケ奉リ始メキ。則ち其の穂を、大幡主ノ女子乙姫に清酒ニ作らしめて、御饌に始め奉りき。千穂始め奉る事、茲因リ也。彼ノ稻ノ生フル地を千田ト号ヒキ。

又明年ノ秋ノ比、真名鷓、皇太神宮ニ当リテ、天翔リ北從リ来テ日夜止マズ翔リ鳴キキ。時ニ白草ニ当リキ。爰ニ倭姫命異シミ給ヒテ、足速男命ヲ差シテ、使トシテ見しめたまふ。罷リ到キテ見れば、彼の鶴ハ佐佐牟江宮ノ前ノ葦原の中ニ還リテ行き鳴きき。使到キテ葦原の中ヲ見ルニ、稻生ヒタリ。本は一基ニ爲テ末ハ八百穂ニ茂レリ。昨ハ捧ゲ持ゲテ鳴キキ。爰ニ使到キテ見頭ハス時ニ、鳴ク声止みテ、天ニ翔ル事モ止ミキ。時に返事白しき。尔ノ時ニ倭姫命欲ビ詔はく、「恐シ。皇太神入り坐せば、鳥禽相ニ悦ビ、草木共モ相ヒ随キ奉ル。稲一本千穂八百

穂ニ茂れり」と詔ひて、竹連吉比古等に仰せ給ひテ、先穂ヲ拔穂ニ半分ヲ抜カシメテ、大穂オホヒキ、カヲ刈らしめ、皇太神の御前ニ懸け奉りき。拔穂は細穂と号ひ、大穂は太半と号ひて、御前に懸け奉りき。仍リテ天都告刀ニ、「千穂八百穂余」と称メ白シテ、仕り奉ル也。因りて其ノ鶴の住める処ニ、八握穂社ヲ造テ祠ル也。

また、「日本民俗学辞典」(中山太郎氏著)の「鶴と稲」の項には、この内容が略述された後に「按に、此種の伝説は各地にある。」という一文が付記されている。神楽歌の「雲雀が富草を持ちて来る」という点には、自由自在に行ける羽を持つ鳥が、穂や種子など、この大地に豊饒繁殖をもたらすものを持ち運ぶという習俗が、背景をなしているものと考えられる。

(イ)「富草」の「草」に関して、「アクセントから見ても、(種クサ)は草とは起源的に別。」(岩波古語辞典)という指摘はあるが、「種クサは草の種タネである。」本となつて、事物を生ずるもの。たね。」(上代語辞典・丸山林平著)という「種クサ」との間に、何らかの關係が介在したものと考えられる。

かくて「富草」の語意は、「この大地に豊饒繁殖をもたらし、人々を富ませるもの」といったものになりはしないかと考えられる。そしてこの語は、「富草の花」や「早苗」のごとく修飾句化にともない、そのような意味がからから、既に「富草が稲穂に置き換へられて然るべき地盤——神事的もしくは呪祝的な行事の如き——が古くから存在し、」(日本歌謡圏史)ともあるが、呪力性・予祝性をおびた使用となり、一面では実在の植物ともなつていったものと考えられ

る。今直接の対象である伊勢神宮文庫蔵の「荒田」の田歌でいうなら、この「富草の花」は、真淵のいう「春田に生る小草」に近いものではあるが、それは右に述べた語意にかなうものであり、それらは更に「後抄」の説のように個有の花化が可能と考えられる。「田植草紙」(山内洋一郎氏編)にみられる類歌は、

この田に咲くは、つば草の花やれ

手に盛り入れて、御所へ参らうやれ

御所へ参れば、葵の花を手に持ち

花を折りては、参らう、御所の御出居へ

このようであり、「富草の花」が「つば草の花」となっている。

(下関市立大学教授)